

## 1. 大学開放の歴史～センター担当教員の研究・実践紹介(7)～

当センターの名前、よく間違えられます。「生涯学習センター」「生涯教育センター」等々。正式には「生涯学習教育研究センター」です。「公開講座を行っているセンター」というイメージが強いかもしれませんが、「研究」もやっています。本NEWSLETTERのVol.3 No.4号(2007年3月)からVol.5 No.1(2008年7月)まで、当センター長・清國の研究・実践テーマの一つである「参加型学習」を紹介して参りましたが、今回からはもう一人のセンター担当教員である山本による「大学開放の歴史」に関する研究成果の一端をご紹介します。

さて、香川大学キャンパス内には、何体の胸像(日本人)があるのでしょうか?私が今のところ気付いているのは経済学部2体、農学部1体です。(もっとあるかもしれません。)すなわち、経済学部構内の隈本繁吉(写真下)、大平正芳、農学部構内の今雪真一の各氏の胸像です。このうち、大平正芳氏は第68-69代内閣総理大臣、今雪真一氏は「南米移民の父」と呼ばれた方で、いずれも香川大学の前身校の卒業生です。

では、隈本繁吉氏は?答えは、経済学部の前身校・高松高等商業学校の初代校長です。彼は「商工経済研究室」という組織を立ち上げ、研究と同時に各種の公開講座(に類する活動)を行いました。それについて、大正14(1925)年に次のような文章を書いています。



本校の授業開始は、昨大正十三年四月下旬に在り。…〔中略〕…爾来、僅かに半歳余に過ぎざるも、従事諸員は克く其の責に任し、講学の余暇乏しきに拘らず、商工業及経済方面より社会各般の事相に至るまで、総て之を対象として、力を材料の蒐集、分類、整理に、分担事項の調査、研究に、或は公開講演に、校外への拡張教授に、或は夏期の講習に、広告函案の展覧に致し、漸次功程の見るべきものあり。即ち本室の事業は、一面には、本校教育の内容を実際化せしむるに与りて力あると共に、他面には、学校所在地方に於ける商工業者を裨益し、延て一般文化の向上に資するの趨向なしとせず。

公開講座は大学史上比較的新しい事業と考えられがちですが、そのようなことはありません。時には歴史を紐解き、初心に帰ることも必要なのではないかと、考える次第です。  
文責:山本珠美(准教授)

## 2. 『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第14号』について

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

2008年度も担当教員に加え、センター外の4人の先生方よりご投稿頂きました。

### <第14号目次>

生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論(3)	清國祐二(生涯学習センター)
『三十年のあゆみ』補遺～高松高等商業学校における開放事業～	山本珠美(生涯学習センター)
アンティゴネー像の解釈について	斉藤和也(経済学部)
『ロミオとジュリエット』における“passion”についての一考察	建畠正秋(元香川県立保育専門学院)
『ファウスト』におけるオイフォーリオン悲劇について	中谷博幸(教育学部)
裁判員就職禁止事由に関する一考察～なぜ、法律学の大学教授と准教授は裁判員になることができないのか?～	高倉良一(教育学部)
生涯学習教育研究センター30周年記念講演会&シンポジウム	

### 3. 英国ランカスター大学の生涯学習への取組(報告)

イギリス出張の折りに、ランカスター大学の生涯学習を担当する部門を訪れてインタビューを行ないました。ランカスター大学は1999-2000アカデミックイヤーに私が国際ロータリー財団の奨学金を得て、在外研究に従事した大学です。約10年ぶりの訪問でしたが、キャンパス内の建物が倍近く増え、目を見張るほどでした。研究大学・大学院としてますます充実しているようです(<http://www.lancs.ac.uk/index.htm>)。当時のスタッフも何人が在職していることもあり、アポイントメントも取りやすく、いろいろな情報を得ることができました。

イギリスでは、一般に大学の生涯学習を通じた地域貢献を担当する部門は“Department of Continuing Education”と呼ばれます。大学として学習機会を提供することを趣旨とするため、その内容はリベラルアーツ(教養)を中心とした構成となっています。受講者のターゲットが壮年期以降ということもあり、フィールドワークやグループワーク等も取り入れ、学習者の参加意識や満足度を高めるための工夫もされています。参考までに、職業教育や資格取得のための学習機会はFEカレッジと呼ばれる継続教育(“Further Education”)のための機関が主に行うという役割分担ができています。



今回、インタビューさせてもらったのは、Jo Nicholsonさんです。彼女のポジションはプログラムアドミニストレーターで、コース(講座)のアレンジをしています。インタビューで特徴的な話をかいつまんで報告することにします。ランカスター大学では昨年度まで500を越えるコースが提供されていたそうで、その大部分は外部講師によるものでした。受講者も3,000人を越えており、夏期プログラムの集中コースではイギリスのみならず、EU圏からの参加もあるそうです。特に北西イングランドという立地が、歴史や文化、遺跡等の魅力溢れるコース設定を可能としているようです。例えば、「考古学の発見」「有史前のイギリス」「山や荒野の野生生物」「鳥類学への誘い」というようなものから、「クリエイティブ・ライティング」「ドイツ語」「イタリア語」などの実用的なものまで、多彩なコースが準備されています。

しかし、今年度からは国家予算の分配状況に大きな変更があり、危機的な状況に陥っているとのこと。コースの担当を外部に依存しているため、財源不足が即コース設定の困難につながるというのです。まだ年度の間中期であり、正確な数字は出ていないのですが、コース数及び受講者数が5分の1ほどに縮小される最悪の予測もあるようです。日本の国立大学法人は、生涯学習は大学の研究及び教育を地域へ還元することで社会貢献を果たそうとしていることもあり、学内の教員が公開講座を担当することが一般的です。残念ながら大きな予算をかけて戦略的に取り組んでいる事業でもありません。イギリスと単純に比較することはできませんが、香川大学の生涯学習戦略を考える上でヒントをもらったような気がしています。

しかし、今年度からは国家予算の分配状況に大きな変更があり、危機的な状況に陥っているとのこと。コースの担当を外部に依存しているため、財源不足が即コース設定の困難につながるというのです。まだ年度の間中期であり、正確な数字は出ていないのですが、コース数及び受講者数が5分の1ほどに縮小される最悪の予測もあるようです。日本の国立大学法人は、生涯学習は大学の研究及び教育を地域へ還元することで社会貢献を果たそうとしていることもあり、学内の教員が公開講座を担当することが一般的です。残念ながら大きな予算をかけて戦略的に取り組んでいる事業でもありません。イギリスと単純に比較することはできませんが、香川大学の生涯学習戦略を考える上でヒントをもらったような気がしています。



文責:清國祐二(センター長・教授)

#### センター雑感

怒濤の1年間が(カレンダー的には)ようやく終わりました。センターとしては30周年という節目の年だったこと、教育・学生支援機構としては現代GP最終年度、学生支援GP初年度だったこと、そして個人としては科研の最終年度だったこと。この1年間で一体どれだけの原稿を書いたのでしょうか? ああ、でも、まだまだやり残したことが山積しています。(山本)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp